

# 青丘文庫研究会 月報

No.265  
2013年1月1日

青丘文庫研究会 〒657-0064 神戸市灘区山田町3-1-1 (財)神戸学生青年センター内  
 TEL 078-851-2760 FAX 078-821-5878 <http://ksyc.jp/sb/> e-mail hida@ksyc.jp  
 ①在日朝鮮人運動史研究会関西部会 (代表・飛田雄一)  
 ②朝鮮近現代史研究会 (代表・水野直樹)  
 郵便振替<00970-0-68837 青丘文庫月報>年間購読料 3000円  
 ※ 他に、青丘文庫に寄付する図書の購入費として2000円／年をお願いします。

新年あけましておめでとうございます。  
 本年もよろしくお願ひします。

2013年正月

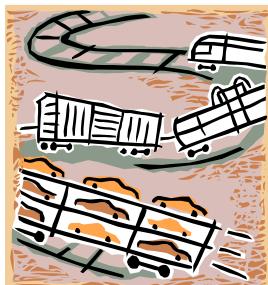


朝鮮近現代史研究会代表 水野直樹  
 在日朝鮮人運動史研究会関西部会代表 飛田雄一

<巻頭エッセイ>

## 「紀州鉄道と芝山鉄道」

高野昭雄



和歌山県の紀州鉄道は全長 2.7km、千葉県の芝山鉄道は全長 2.2km。全国の普通鉄道の中で、最も距離の短い2つの鉄道として知られている。2012年、私はこの2つの鉄道に乗ることが出来た。

紀州鉄道は、JR御坊駅と寺内町で有名な御坊旧市街とを結ぶ。前身の御坊臨港鉄道は、1928年に設立され、1931年に開業した。平均時速 20km で、1日 26 往復。車体を軋ませながら、ゆっくり緑の田園地帯を走る。レトロそのものである。1両編成のワンマン運転で、乗客は私以外に3人だけ。1日の乗客数は、100~200人という。料金を運賃箱に入れるのではなく、運転手さんに直接素手で手渡すのには驚いた。

終点の西御坊駅は、寺内町の西はずれにある。西本願寺日高別院を中心とした御坊寺内町は、「大正のロマンが息づく町並み」と一応は宣伝されている。だが観光地化されているというよりは、むしろ寂れた風情で昔の面影を伝えている。手作りの味噌や醤油を扱う商店が少し目立つ程度である。

紀州鉄道グループは全国で「紀州鉄道ホテル」を経営しており、そちらが主力事業である。鉄道を経営しているということで、ホテル・不動産事業の信用に役立てている。鉄道事業は小規模なため、赤字の絶対額が少なく、それが存続につながっている

これに対し、千葉県の芝山鉄道は、成田国際空港株式会社の連結子会社であり、実際に鉄道が開業したのは、丁度 10 年前の 2002 年と新しい。飛行場建設のため、空港東側地域への通行が分断されたことに対し、国が建設を約束して作られた。東成田駅（旧成田空港駅）から芝山千代田駅まで走り、途中駅はない。

東成田駅は地下駅で、京成電鉄と共に用にならっている。成田方面から運行してくる京成電車は、東成田駅からそのまま芝山鉄道の地下線を、用地買収の出来なかった土地を避けて迂回しながら走り、ほぼ中間地点からは高架上を走る。終点の芝山千代田駅も高架になっていて、飛行場の眺めがよい。この短い鉄道は、一日の乗客数が2000人弱。車両には、過激派のテロを警戒した警察官が乗り込んでくる。

芝山鉄道は、いまだに解決をみない成田闘争の悲劇によって生まれたともいえる。成田空港の周辺は、空港関連施設や空港関連企業が、あちこちにやや殺風景な形で立ち並んでおり、かつての美しかった農村風景は偲ぶことが出来ない。

紀州鉄道は昔からあまり変わらない土地を、芝山鉄道は逆に激変した土地を走る。対象的ではあるが、いずれの場所からも、日本現代史のあれこれが感じられる。忘れないでいたい。

第284回在日朝鮮近現代史研究会（2012年9月9日）

## 「笑いの島－チエジュ」へ 鈴木常勝



### 1、「笑いの島－チエジュ」へ

2012年8月1日から7日間、韓国のチエジュ（済州島）に行ってきた。

「済州島一周・旅芸人道中」と名乗って、紙芝居、大阪在住モンゴル人の馬頭琴演奏、それにカッポレ踊り、皿回し、公演ではモンゴル女性服を着る女装おじさんなど五人組が、島のあちこちで「日本芸能とモンゴル音楽の紹介」をやってみせようとの意気込みで、島に乗り込んだ。

済州島の友人の支えで、島の東北部にある迷路公園から西南端のソンアクサン（松岳山）まで、北のチエジュ市の小学校、観光地、若手アーティストのたまり場から、南のソギッポ（西帰浦）市の「イ・ジュンソプ美術館」にある復元かやぶき造りのジュンソプの庭、若者に人気のモダンな喫茶店、町おこし路上パフォーマンス参加まで、7日間で8ヶ所もの公演ができた。若い親に連れられた保育児から、小学生、若者カップルやグループ、パフォーマンス・アーティスト、路上で出会ったハルモニ（おばあさん）、ハラボジ（おじいさん）がお客様になってくれた。

紙芝居に話をしぶって進めよう。

初回の迷路公園。「こんにちは」「日本人です」「スズキと言います」とのあいさつは韓国語を使ったが、漫画紙芝居は日本語でやる。

「夏休みの宿題ができていない小学3年生のチョンちゃんは、新学期の初日、わざと蜂に刺されてズル休みしようとする。蜂の巣をつづいたところ、無数の蜂に襲撃され、頭が腫れあがってしまう。いたずら坊主のチョンちゃん、今日もまた大失敗」という、10枚の絵の短編紙芝居。

予想通り、小さい子らは蜂にボコボコ頭にされたチョンちゃんの場面で大笑い、つられて若い親たちもニコニコ顔。

公園の係員が「私も東京留学の経験がある」とのことでの手作り紙芝居「うらしま太郎」の通訳

をしてもらう。こちらも調子に乗って「♪昔、昔、うらしまは…」の歌も入れて、大サービス。乙姫主催「うらしま歓迎パーティ」のごちそう攻めの場面で「マシッソヨ！」（おいしいです）と韓国語のセリフを入れると、お客様は大喜び。

着物姿で演じたので、紙芝居の後は多くの家族と何度も何度も記念撮影。スター気分の初日だった。

最終日は、夏休み登校日の小学4年から6年の40人の生徒と先生5人を相手に実演。

「みなさんにお会いできてうれしいです」という簡単な韓国語のあいさつをすると、「オッ！」という小さな驚きの声が一斉にもれた。気を良くしつつ、「紙芝居のセリフも韓国語でやつたらよかつた」という後悔の念がひらめく。

この場を設けてくれたチェジュ大学の研究者が流暢な通訳をしてくれる。

彼女は「うらしま歓迎パーティ」に出た「たこ焼き」までも子どもたちに韓国語で説明ができるのだ。

乙姫がうらしまに恋心を抱く場面では、往年の韓国の大ヒット歌謡「サランヘ」（愛しています）の一節を俺は韓国語で歌う。子どもたちは一瞬、意外な顔をし、そして喜びの声をあげる。

俺は問うー「今、うらしまは25歳。みんなも25歳になつたら結婚する？」。

俺は韓国でも晩婚、非婚、少子化が大きなニュースであることを聞いていた。「30歳になってから」の声があがる。

「みんなは結婚したい？」と俺。すると、半数以上の生徒が「したくない！」。その声が教室いっぱいに響いた。通訳も俺もこの回答ぶりにたじろぐ。

実は大阪のあちこちで「うらしま」の話の途中に子どもたちに問うと、やはり「したくない！」の声が半数を超えるのだ。

チェジュは島国だから似た話があるだろうと予想して「うらしま」を持って行ったのだが、「そんな話はチェジュにはない」と小学生たちは言った。

さて、「チョンちゃん」では、語学の知識を披露。

「蜂の羽音を韓国人はワインワインと聞くが、中国人、日本人どう聞くか？」

わからない彼らに得意顔で説明するー「中国ではウォンウォンと飛び、日本ではブンブンと飛ぶ」。韓国語の「ワインワイン」は迷路公園の通訳から聞き、中国語の「ウォンウォン」は30年前、北京の子どもから教わった。

「もうみんなは、三ヶ国語もできるんやね」とチェジュの小学生をおだてる。

チェジュ市の代表的観光地であり、中世役所跡である「觀徳亭」での公演許可を、現地の友人が取ってくれた。

俺はチェジュの旅を着物姿で通したのだが、それが目に付いたのか、公演準備中にそこにいた市民から「韓国の文化財の前で日本人になぜ公演させるのか」という抗議が、立ち会っていた觀徳亭事務所の人に投げかけられた。30分間の公演中にも事務所に同様の抗議電話がいくつかあったそうだ。

事務所の人は私たちに好意的だったが、「反日行動」を目の当たりにした、忘れられない一日となつた。日本に戻つてから「植民地時代の1919年3月、反日独立運動の三・一集会があつたのが觀徳亭の地」と聞いた。

今回の旅芸人道中は、「紙芝居を韓国人に紹介して、一緒に笑おう」との目的だったが、実は戦時中の日本政府は、植民地支配の道具として「国策紙芝居」を韓国人（当時は朝鮮人）に見せて、戦争推進（兵士志願や日本語強制）を図つた。国策の「洗脳と強制の紙芝居」は俺の目指す「笑いとホンネの紙芝居」と対極にある。

そのことについては、またの機会に。

俺は「笑いの島—チェジュ」を生み出すために、これからも紙芝居を持ってチェジュを訪ねる。「教材としての紙芝居」ではなく「笑いとくつろぎの紙芝居」を持って。



俺は水あめを売って稼ぐ現役の「紙芝居屋」を大阪で40年続けています。紙芝居アジア漫遊と俺の芸風については『紙芝居は楽しいぞ!』(岩波ジュニア新書)、『紙芝居がやってきた』(河出書房)、『保育に生かす紙芝居』(かもがわ出版)を見てください。

「国策紙芝居」については『メディアとしての紙芝居』(久山社)、『戦争の時代ですよ!ー若者たちと見る国策紙芝居の世界』(大修館書店)に書きました。

8月初旬、韓国・最南端の济州島に行った俺は、9月初旬、朝鮮半島の北端、鴨緑江の流れに身をまかせていた。

南と北から朝鮮半島を挟んで見つめるという、偶然がもたらした意外な展開に自分でも驚いている。

## 2、鴨緑江ー北朝鮮進入記

2012年9月5日、北朝鮮と国境を接する中国の町、丹東市（タントン）に行った。

もともとは、「大連・旅順・瀋陽」をめぐる4泊5日の観光を目的とした、おっさん三人の旅だった。日本帝国が占領していた大連の「満洲国」建築遺跡、日露戦争跡地の旅順、そして清朝発祥地の瀋陽故宮参観を予定していた。

大連の「大連賓館」(旧ヤマトホテル)に4泊し、当時の日本帝国と傀儡国家「満洲国」の榮華がホテルのレストランやラセン階段の造りに反映しているのを毎日満喫しながら、各地に出かけた。



たまたま出会った大連のガイドが「大連から丹東へ日帰り観光も可能だよ」と言う。大連から瀋陽まで行くのに、特急で4時間半かかる（この列車には実際乗った。大連からの日帰りでは瀋陽滞在時間がたった4時間しかとれなかった）。大連から瀋陽経由で丹東へ列車で行けば、10時間かかる（後ほど列車時刻表で確認した）。

まるで、推理小説の謎解きのようだ。

「どうして日帰りで大連から丹東へ行けるのか？」

答えは「高速道路」の完成にあった。

フォード車の広い座席に（ガイドの個人案内のお忍び旅行のため、誰かの自家用車を調達したようだった）、我々三人とガイド、運転手の劉さんが乗り込んだ。行き来の車もまばらな高速を100キロを越すスピードで突っ走り、途中二ヶ所の手洗い休憩をとって、大連8時半出発、丹東12時到着といううすばらしさ。地図で確認すれば、黄海沿いに大連市、東港市、丹東市と続いているのだ。これなら内陸の瀋陽を経る必要がない。

「日帰り観光」の謎が解けた。

鴨緑江の両岸を結ぶ2本の鉄橋は1911年日本が造ったと、案内板に書いてある。西側の1本は、朝鮮戦争の時期にアメリカ軍によって朝鮮側が破壊された。その橋が、「鴨緑江断橋」と名付けられて、観光名所になっている。中国側から「断橋」の先端まで歩いて行くことができる（料金

三十元)。もう1本の橋は「中朝友誼橋」と名付けられ、自動車、バス、トラックが朝鮮側に向かっていた。朝鮮側からは、人が歩いて中国側に来ており、「親族訪問」のようだった。

橋の見えるレストランで昼食をとり、いよいよ、朝鮮領に進入する船の乗り場に向かう。政府公認の大きな遊覧船は「断橋」付近から出航しているが、我々の目指すのは、マイナーな(非公認? 非合法? 黙認? 利権者の特権?)遊覧船だ。「それがおもしろい」と30歳を過ぎたばかりの若いガイドのおすすめだった。四十歳代の運転手・劉さんも初めてその遊覧船に乗るようで、興味津々、うれしそうに車を運転する。中国人にとっても朝鮮は「謎の国」のようだった。

船着場の手前で、ガイドがひとりのおばさんと打ち合わせをする。私設船乗り場の世話役だろう。車から下りて、土盛りの堤防を下る。道ではなく、大きな石がゴロゴロしている河川敷きを歩く。三十人乗りほどの中型遊覧船が岸に二隻泊っている。十人乗りのモーター舟が五艘並んでいる。

四十人ほどの乗船待ちの客は、我々を除いてすべて中国人。でも、だれも我々外国人に興味を示さない。これから船旅にすべての興味が向かっている。5分ほどしてモーター舟に乗り込む。舟の運転手は三十歳前後の日焼けした坊主刈の筋肉質の兄ちゃん。体重が均等になるように、乗客の席替えをその運転手が命じる。我々は黄色い救命チョッキを着けている。

ボートが鴨緑江を下流に向かって進む。川の波がドーン、ドーンとボートにぶつかり、ボートが急降下する。まるで遊園地の遊具に乗った怖さ面白さ。

朝鮮側の岸に近づく。兵士がいる、一軒家の監視小屋。男女二人の兵士が壁の修理か掃除をしている。二人は我々のボートには関心を示さない。運転手が「写真は写さない」と言う。最近距離の間、運転手は客に撮影を自粛させた。

客はしっかりと目をこらして朝鮮領内を見る。崖の草地に十数匹の羊の群れがいる。投網を持った川辺の漁民。川沿いの平地に続く水田。今は使わないコンクリート造りの船着場。反対側の岸も朝鮮領で、十軒ほどの平屋住宅が並ぶ。ハルモニ(おばあさん)がひとり、腰を曲げて歩いている。ハングルの看板がある。運転手によれば「金日成万歳」と書いてあるそうだ。

両岸が朝鮮領ということは、我々は朝鮮領内にいるということだ。「朝鮮に進入した」のだ。おとがめなしの「朝鮮進入」はなぜ可能なのか? ここにも推理小説ばりの謎がある。

ボートが七十度ほどの角度で急カーブを切る。ボートから落ちるのではないかと思うほどの傾斜。客たちは楽しい悲鳴を上げる。もちろん俺も大声を出す。また、遊園地のノリ。もと来た航路を引き返すのだ。

川の中央に一人の中年の日焼けした漁師の乗った釣り船が見えた。来る時にはみかけなかったのだが…。

ボートの方から釣り船に近づく。漁師はみやげ物セットを数種類取り出す。ボートの運転手が仲立ちとなって、客にみやげ物を見せる。運転手は土産売りの漁師には朝鮮語を使う。俺は百元(約千三百円)で1セット買う。他に買った人はいなかった。一見して質がよくないことはわかるし、中国人にとって百元は安くない。

後でセットの中身を調べたら、次のような品物が入れてあった。

- ビニールのがま口(名所風景と娘たちを描いた朝鮮画の絵)
- ぐい飲み5個セット(朝鮮の古典画の絵付け)
- タバコ4種類(4箱)
- 箸とスプーンセット(柄には赤地に花模様。プラスティック箸入れ容器付)
- 朝鮮切手アルバム(記念スタンプ押し、または使用済の切手45枚と切手用アルバム)
- 朝鮮紙幣(1947年発行の紙幣など7枚。紙と印刷が新しいので複製のようだ)

帰国後、セットの内容を確認しながら、俺は「ガセネタが混じっていようと、買って後悔しない内容だ」と一人つぶやいた。「でも、あの漁師のおじさん、どこからでも見えそうな川の上で、あ

ぶない商売を続けていて大丈夫なんかな?」とも思う。ここにも「お目こぼし」の仕組みがあるのだろうか。朝鮮では百元(約千三百円)は高い価値があるはず。

またしばらく、川に戻る。岸は崖で青い草が生えている。小学生ほどの子どもが三人、ボートの運転手に向かって、胸の高さで両手を横に長く広げる。運転手は岸のギリギリ近くまでボートを寄せる。

「八十元でタバコを1カートン買えば、子どもたちにあげる」と運転手が客たちに言う。「子どもたちはタバコを食べ物に換える。大人に見つかれば叩かれる」と運転手は説明する。

客が金を出したのか、運転手が一人の子どもに1カートンのタバコを投げてやる。3人の子どもが取り合う。一人の子がタバコを奪って、一目散に急角度の崖の道を駆け上がる。二人の子が追いかける。急角度の崖を痩せぎすの子らが走りあがる。

子どもがもう一人、素早く崖を駆け下り、川岸に来る。やはり胸の前で両手を広げ、タバコが欲しいと表現する。俺ともう一人の日本人、そしてフォード車を運転する劉さんが割り勘で八十元を出し、その子にタバコをやるように、ボートの運転手に言う。運転手が放り投げたタバコが岸に届かず、水中に落ちる。客たちは一瞬、息を呑んだ。タバコを湿らせては、転売できないだろう。いや、タバコが流れてしまえば…。

子どもはすぐさま川に足を突っ込んでタバコを拾う。客たちは安堵の溜息を漏らす。

ボートは船着場に戻る。先ほど、ガイドと打ち合わせていたおばちゃんが、朝鮮紙幣セットを売りに来る。八十元の言い値を六十元に値切って買う。「町中で売っている紙幣セットはみんなニセモノ。このおばさんはホンモノ」というガイドの言葉を信じた。

遊覧ボートの後は、万里の長城の西端に当たる「虎山長城」見物。ここには一步の幅で朝鮮に足をかけることができるという「一步跨」という碑がある。溝のような小さな川の支流の向こうは朝鮮領の水田が広がる。だが、いまは中国側に鉄条網がある。

ここに万里の長城があったということは、この長城より北は騎馬民族の活動の地だということだ。長城の防壁の天辺から、朝鮮をながめれば一面の青い水田。遊覧ボートが通った航路を確認する。確かに朝鮮領の島と朝鮮領の対岸の陸地の間をボートは通ったのだ。

丹東市で買った「丹東市地図」で確認すれば、鴨緑江の中洲にできた島は多くあり、それぞれ朝鮮領、中国領と明記してある。両岸が朝鮮領の箇所は丹東市の地図で2ヶ所確認できる。俺たちはその内の上流側の一ヶ所に行ったのだ。

5時過ぎに、北朝鮮が経営して朝鮮人のウエイトレスが仕事をするレストランに入る。「断橋」のすぐそばにある。ウエイトレスがショータイムには、舞台の歌手や演奏者になる。十人用のテーブルが十個ほどある、小規模なレストラン。

ガイドによれば、ここで仕事をしているのはすべて北朝鮮から出稼ぎだとのこと。30分ほどのショータイムの歌と踊りはすべて北朝鮮のもの。

歌手と演奏者は二十歳前後の清楚な美人。若い日の吉永小百合に似た雰囲気。店で準備した花束をお客から歌手にプレゼントさせたり、最後は数人の客と歌手が手をつないで店内を歌いながら一周するなどの企画もある。

ここ料理は期待はずれ。

チヂミは、まるで大阪のお好み焼き。マヨネーズがかかっているし、鰹節を振り掛けるとは、何事じゃ! 外道もエエ加減にせい! 好意的に考え、「大阪育ちの朝鮮料理人の心」を受け取ろうか? しかし、「ニラが入ってない」「卵入りのお好み焼きのように「ふんわり生地」のやさしい舌触り」をチヂミと名付けて売るのは許せない! チャプチェ(春雨炒め)もまずくて、一箸つけただけで誰も食べなかつた。「スープはいりませんか」とウエイトレスが勧めたものは「味噌汁」だった!

結局、俺たちのテーブルで皆が手を伸ばしてやめられなかつた料理は「蒸した川蟹」だ。この川蟹は、朝鮮領の鴨緑江で劉さんが土産売りの川漁師から百元出して買った、大鍋一杯くらいの量の

野生天然のものだ。その川蟹をこの朝鮮レストランで蒸してもらったのだ。

「やっぱり野生はおいしい」と劉さん。俺たちもお相伴にあずかる。

見たところ小型の上海蟹のようで、はさみに苔が付いている。ミソの美味しさを味わう。大皿に山盛りになった「鴨綠江・野生天然蟹」は瞬く間に食べつくされた。

劉さん、ごちそうさん！

夜の高速道路はほとんど車が通っていない。

車中で居眠りしつつ、大連のホテルに戻った。

「夜大連」も見なければ！

「遊び人」を自称する若いガイドが「友人が大連賓館そばのライブハウスにいる」と言うので、ついて行く。

大音響のライブハウスで入れ替わり立ち代り若い歌手が歌う。ミラー・ボールではなく、派手な色の尖った光線が暗い室内を掛け巡る。若者の客たちが立ち上がって、ライト付の棒やバルーン細工の風船をリズムに合わせて振る。部屋が大音響のリズムで一体となる。

若いガイドの若い友人は、豪華なフルーツ盛りと高そうなドリンクを飲み、俺たちにも振舞ってくれる。メニューを見ると、洋酒は日本円で1万円を越える。

初対面の俺とも、飲み物を注ぐ度に「乾杯！」を繰り返す。中国では「友だちの友だちは皆友だち」がすぐに実現する。「料金が割り勘になつたら、どないしよう！」とケチな恐れが頭をよぎる。でも、ガイドの友人はにこやかに俺たちを送り出してくれた。

更に深夜、12時過ぎの「ショーホール」に一人で入る。一番安い四十元（約五百円）のビールを注文すれば、好きな時間、ショーを見られる（もちろん、とびっきり高いドリンクも用意されている）。

出演者はすべてフィリピン人だった。ポールダンス、歌、ゴーゴーダンス、客が踊れる時間などが繰り返される。店内の電光掲示板には「ダンサーに五十元のチップを」とのお知らせ。

西欧人の若い女性もグループや女友だちと一緒に来ているが、常連ではなさそう。

店内には西欧人、アラブ系の男性が目立つ。なじみのダンサーに囲まれている西欧人が目の前のテーブルにいる。西欧、アラブ、アジアの風貌を持つおおかたの男性は常連のようで、彼らからは駐在員のニオイがした。

俺が一人だと見ると、「お酒のお相手はいかが？」と女性が寄ってくる。「ショーを見に来た」と言って断る。やはり「男女の出会いの場」としてバー・ホールがある。

世界からの駐在員が住む大連には、風俗産業が席捲している。「マッサージ」のカンパンを掛けた売春が大っぴらに宣伝広告を、日本人駐在員向けのフリーペーパーに出す。

### ☆

「飢えた北朝鮮」と「消費社会の大連」が、たった3時間半の距離にある。

「満洲国の歴史」をこの目で見るのが今回の主な目的だったが、「清朝発祥の地・瀋陽」「日露戦争の跡地・旅順」「満洲国の遺跡・大連の建築」などの旅のテーマは吹っ飛んでしまった。

旅を終えた今は、

「飢えと富は偏在するものか？」

「超高層ビル建設ラッシュの大連の豊かさとは？」

「風俗産業全盛の大連で駐在員暮らしは幸せか？」

という目前の問い合わせが、深くアタマにからみつく。

それらはまさに「日本の今、ここにある問題」だと感じているから。

## ●青丘文庫研究会のご案内●

### ■第285回朝鮮近現代史研究会

2013年1月13日(日)午後1時～3時

「侯啓剛の統一戦線論と『反傾向闘争』」田中隆一

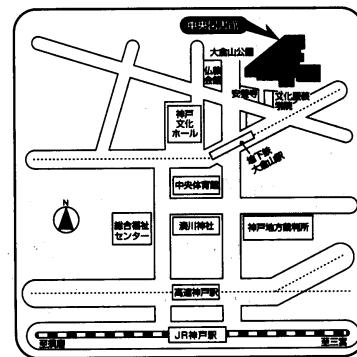
### ■第338回在日朝鮮人運動史研究会関西部会

2013年1月13日(日)午後3～5時

「解放」直後在日朝鮮人による濁酒闘争 李杏理

※会場 神戸市立中央図書館内

青丘文庫 TEL 078-371-3351



### 【今後の研究会の予定】

2月10日(日)近現代史(坂本悠一、李景珉)、在日(休み)、3月10日(日)在日(松田利彦)、近現代史(未定)、研究会は基本的に毎月第2日曜日午後1～5時に開きます。報告希望者は、飛田または水野までご連絡ください。

### 【月報の巻頭エッセイの予定】

2月号以降は、李景珉、李裕淑、小野容照、梶居佳広、中川健一、黒川伊織、砂上昌一、三宅美千子、佐野通夫、吉川絢子、安致源、伊地知紀子、太田修、高正子、坂本悠一、全淑美、足立龍枝、渡辺さえ、池貞姫、張允植、横山篤夫、松田利彦、西村寿美子、玄善允、川口祥子。よろしくお願ひします。締め切りは前月の10日です。

### 【編集後記】



- みなさんは新年をどのようにお迎えでしょうか。さて、「新年あけましておめでとうございます」が間違いだと、テレビのクイズ番組でしていました。2013年が良くない年だということではなくて、明けるのは「大晦日」であって、新年が明けるのはおかしいとのことでした。大勢に關係のないおなはし、でした……。
- いざれにしても、本年もよろしくお願ひします。神戸学生青年センターの名刺型カレンダーを郵送の方には同封いたします。実は、このカレンダー、誤植があるのです。発見された方には、飛田が6億円ジャンボに当たったら1億円さしあげます…。ヒントは、1月です。
- 12月号の月報は休ませていただきました。休刊が多くて申し訳ありません。12月9日の研究会は、朝鮮近現代史研究会は、お休み。第338回在日朝鮮人運動史研究会関西部会は、①「戦前期の新聞・雑誌等に見られる在阪朝鮮人の生活関連写真」塚崎昌之、②「在日済州人女性の巫俗実践とその伝承—「龍王宮」を中心に」玄善允でした。
- だいぶ先の話ですが、『在日朝鮮人史研究』43号の原稿を募集します。400字、40枚までです。  
飛田雄一 hida@ksyc.jp

